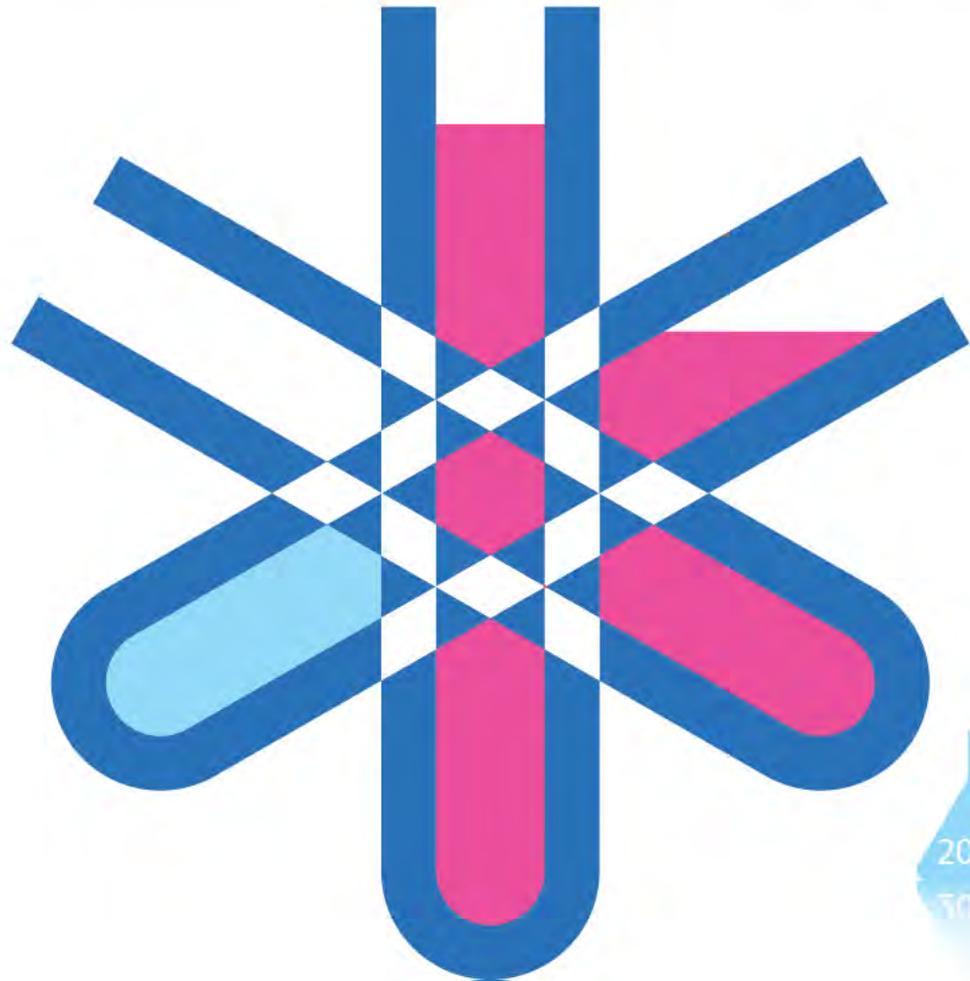


検査情報月報



2016
5月

横浜市衛生研究所

平成28年5月号 目次

【トピックス】

平成27年度 医動物・食品中異物検査のまとめ	1
小児科定点医療機関における病原体サーベイランスのまとめ	3
劇症型溶血性レンサ球菌感染症のまとめ	4
食品中の放射性物質検査結果	6

【感染症発生動向調査】

横浜市感染症発生動向調査報告 4月	7
-------------------------	---

【情報提供】

衛生研究所WEBページ情報	11
---------------------	----

平成27年度 医動物・食品中異物検査のまとめ

医動物担当では、人の健康を害したり、不快感を与える昆虫、ダニ、寄生虫等の試験・調査・研究を行っています。

その中の一つとして、各区福祉保健センター、各市場検査所、事業者等の依頼を受けて、昆虫類を中心に食品へ混入した異物の検査を行っています。平成27年度の食品中異物検査実績は、11件で、すべて昆虫類でした。

内訳は、コウチュウ目が4件、ハエ目3件で、ゴキブリ目、カメムシ目、ハチ目、その他が1件ずつでした。今回は、同定結果の詳細を報告します。

相談内容・発生状況等	写真 (状態、体色、大きさ)	同定結果	生態・その他
パスタに虫が混入していた	 成虫、茶褐色、3mm	コナナガシクイ (コウチュウ目)	麦、米、トウモロコシなどの貯穀類、ナッツ類、乾麺、ビスケットなどの加工食品など、でん粉を含む多くのものを食害する。世界共通種である。
肉まんから虫が出てきた	 成虫、褐色、約2mm	ヒラタムシ科 <i>Cryptolestes</i> 属の一種 (コウチュウ目)	ヒラタムシ科の多くの種は朽木、樹皮下に生息する。 <i>Cryptolestes</i> 属の種は貯穀害虫で、穀粉などを食害する。体が平たく微小なため、袋の縫い目などからも侵入しやすい。
冷凍小龍包に虫体が混入していた	 成虫、茶褐色、2.5mm	コウチュウ目の一種 (コウチュウ目)	コウチュウ目は種類が多く、日本では約一万種以上の種類が知られている。貯蔵食品害虫として知られる種も多く、その食性も広い。
パンに虫体が混入していた	 成虫、茶褐色、3.5mm	コウチュウ目の一種 (コウチュウ目)	同上
食パンにウジ状の虫体が混入していた	 サナギ、茶褐色、6mm	ヒラタアブ亜科の一種 (ハエ目)	幼虫は脚が無くウジ状でアブラムシ類を捕食する。成虫は花の蜜を吸う。

相談内容・発生状況等	写真 (状態、体色、大きさ)	同定結果	生態・その他
鶏肉に虫が付着していた	 成虫、黒色、2mm	チョウバエ科の一種 (ハエ目)	夜に活動し、昼間は発生源近くの物陰などに休止している。幼虫は家屋内では浴室や台所の排水周り、下水管など腐植質が豊富で多湿な環境から発生する。
ピクルスに幼虫が混入していた	 幼虫、乳白色、10mm	ミバエ科の一種 (ハエ目)	幼虫は食植性で、果実に潜む種が多い。幼虫はミカン科、ウリ科、キク科など、多くの植物の果実や花蕾、茎、葉などに潜り、虫こぶを形成する種もある。重要な農業害虫を多く含む。
缶詰に虫が混入していた	 幼虫、黒褐色、9mm	チャバネゴキブリ (ゴキブリ目)	小型のゴキブリ。飲食店、ビル、事務所などに生息し、気温の低下がない場所では冬季でも活動が見られる。雑食性であらゆる物を食害する。世界各地に分布する。
弁当に虫がみられた	 成虫、黒色、9mm	クロホシカメムシ (カメムシ目)	地表性で植物の根ぎわや石の下で生活しているが、イネやダイズなどを吸収することもある。
ご飯にアリが混入していた	 成虫(働きアリ)、黒色、9mm	クロオオアリ (ハチ目)	開けた場所の乾燥した地中に巣をつくる。巣口は地表に直接あける。畑や林道、住宅地や公園など都市部にも多く生息する。
アーモンドに異物がみられた	 脱皮殻、マユ、褐色、10mm	昆虫類の蛹の脱皮殻とマユ	昆虫では、特にチョウ目のガ類の一部で、絹糸の繊維質のマユがみられる。チョウ目の他にも、アミメカゲロウ目やハチ目などもマユを作ることがある。

【 微生物検査研究課 医動物担当 】

小児科定点医療機関における病原体サーベイランスのまとめ (細菌検査について)

当所では、感染症法に基づく感染症発生動向調査事業の一環として病原体の検索をおこなっています。細菌担当では、市内8か所の小児科定点医療機関から送付された細菌検査検体について主にA群溶血性レンサ球菌咽頭炎および感染性胃腸炎について検査をおこなっています。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は、ランスフィールドの分類でA群に分類されるレンサ球菌による咽頭炎であり、小児では発赤、高熱、発疹を伴う咽頭炎を呈し、重症化すると猩紅熱、続発症として急性糸球体腎炎、リウマチ熱等を発症することがあります。感染性胃腸炎は、細菌またはウイルスなどによる嘔吐、下痢などを主症状とする感染症です。原因はノロウイルスやロタウイルスが主ですが、細菌性のものも含まれます。

今回は2015年1月から12月までの1年間に小児科定点医療機関から受け入れた検体についてその検査結果を報告いたします。

最初にA群溶血性レンサ球菌咽頭炎ですが、患者の咽頭拭い液52検体から分離されたA群溶血性レンサ球菌41株のT型別¹⁾結果を表に示しました。市内では、T型別不能株が23株(56%)と過半数を占め、例年とは異なった傾向でした。これらの結果は、衛生微生物技術協議会溶血レンサ球菌レファレンスセンターに報告しており、全国のデータがまとめられて国立感染症研究所のホームページで報告されます²⁾。

次に感染性胃腸炎ですが、下痢、発熱、血便などを呈している患者の直腸ぬぐい液2検体について起因菌の検索を行いました。起因菌は検出されませんでした。

その他に、膿痂疹を呈した患者の皮膚病巣(痂皮)等の4検体について起因菌の検索を行った結果、B群溶血性レンサ球菌Ⅲ型が1株、黄色ブドウ球菌(表皮剥脱毒素A産生)が2株検出されました。

表 病原体サーベイランス検体から分離されたA群溶血性レンサ球菌のT型別結果

菌型	T1	T4	T6	T12	T28	TB3264	型別不能	計
2015年1～12月	3	8	1	2	2	2	23	41

¹⁾ T型別とは、A群溶血性レンサ球菌の菌体表層に存在するT蛋白の血清型別のことで、疫学調査の手段として広く用いられています。

²⁾ 国立感染症研究所 第36回衛生微生物技術協議会溶血レンサ球菌レファレンスセンター等報告
<http://www.nih.go.jp/niid/ja/allarticles/manual/297-labo-manual/5831-reference-report36.html>

【 微生物検査研究課 細菌担当 】

劇症型溶血性レンサ球菌感染症のまとめ (病原体の検査結果について)

劇症型溶血性レンサ球菌感染症は、A群やG群の溶血性を示すレンサ球菌によって引き起こされる感染症です。基礎疾患の有無に関わらず、突然の四肢の疼痛、腫脹、発熱などで発症し、その後急激に軟部組織壊死、急性腎不全、播種性血管内凝固症候群(DIC)、多臓器不全(MOF)を引き起こしショック状態から死亡することも多い感染症です。1999年の調査開始から患者数は増えており、2015年の感染者数はこれまでで最も多く、前年の273例を大きく上回り、全国で年間425例となっております。

当所では、感染症法に基づく感染症発生动向調査事業の一環として市内の医療機関から送付された劇症型溶血性レンサ球菌感染症の患者から分離された菌株についてT型別¹⁾、*emm* 遺伝子、発赤毒素(*spe*) 遺伝子の検査をおこなっています。さらに菌株を国立感染症研究所に送付し、そこでM型別¹⁾、薬剤感受性試験などをおこなっています²⁾。

今回は2015年1月から12月までの1年間に市内の医療機関から受け入れた菌株についてその検査結果を報告いたします。

市内では、これまで毎年5株程度の菌株が搬入されていた感染症ですが、2014年に13事例と急激に増加し、本年も引き続き12事例と多く、搬入される菌株が近年増加しています。その起因菌の多くはA群溶血性レンサ球菌でした。そのうち「T1型 M1型 *emm* 1.0」の株が3事例から分離されましたが、その他は様々な型を示しました。「T1型 M1型 *emm* 1.0」の株は、これまで劇症型溶血性レンサ球菌感染症患者から最も多く分離されている型になります。また、今年はB群溶血性レンサ球菌による1事例、G群溶血性レンサ球菌による4事例の菌株が搬入されました。G群は全て *Streptococcus dysgalactiae* subsp. *Equisimilis* と同定されましたが、そのシーケンスタイプ(*stG*)は全て異なっていました。

¹⁾ T型別、M型別とは、A群溶血性レンサ球菌の菌体表層に存在する蛋白の血清型別のことで、疫学調査の手段として広く用いられています。M蛋白は抗オプソニン作用を示し、病原因子として知られています。また、*emm* 遺伝子による型別はそのM蛋白遺伝子で型別する方法です。

²⁾ 国立感染症研究所 第36回衛生微生物技術協議会溶血レンサ球菌レファレンスセンター等報告 <http://www.nih.go.jp/niid/ja/allarticles/manual/297-labo-manual/5831-reference-report36.html>

表 2015年に分離された劇症型溶血性レンサ球菌感染症由来菌株の検査結果

発症日	年齢	性別	材料	菌名	T型	M型	<i>emm</i>	発赤毒素遺伝子 (<i>spe</i>)
1/7	70	男	血液	G群 <i>S. dysgalactiae</i> subsp. <i>equisimilis</i>			<i>stG</i> 6792.3	
2/22	40	女	血液	A群	UT	UT	87.0	<i>speB</i>
3/16	72	女	血液	G群 <i>S. dysgalactiae</i> subsp. <i>equisimilis</i>			<i>stG</i> 2078.0	
3/22	64	女	血液	A群	T1	M1	1.0	<i>speA</i> 、 <i>speB</i> 、 <i>speF</i>
4/15	65	男	血液	G群 <i>S. dysgalactiae</i> subsp. <i>equisimilis</i>			<i>stG</i> 485.0	
5/17	90	女	血液	A群	T3	M3	3.95	<i>speA</i> 、 <i>speB</i> 、 <i>speF</i>
6/26	66	女	血液	A群	TB 3264	UT	89.0	<i>speB</i> 、 <i>speC</i> 、 <i>speF</i>
7/26	2	男	関節液	A群	T1	M1	1.0	<i>speA</i> 、 <i>speB</i> 、 <i>speF</i>
7/21	67	女	血液	A群	T1	M1	1.0	<i>speA</i> 、 <i>speB</i> 、 <i>speF</i>
9/5	0	男	髄液、血液	B群 III				
9/9	42	男	皮膚病巣	A群	T12	M12	12.0	<i>speB</i> 、 <i>speF</i>
9/12	73	女	血液	G群 <i>S. dysgalactiae</i> subsp. <i>equisimilis</i>			<i>stG</i> 245.0	

【 微生物検査研究課 細菌担当 】

食品中の放射性物質検査結果

平成23年3月に、東日本大震災による福島第一原子力発電所事故がおき、食品中の放射性物質検査が急務となりました。そこで、横浜市衛生研究所においてもガンマ線核種分析装置を導入し、平成23年7月から検査を行っています。

平成27年度に当所で行った食品の検査結果は表1、表2のとおりで、基準値*を超えた検体はありませんでした。

* 放射性セシウム(Cs)の基準値(Cs-134とCs-137の合計)

乳児用食品:50Bq/kg、飲料水:10Bq/kg、牛乳:50Bq/kg、一般食品:100Bq/kg

表1 検体の種類

検体の種類	説明	検査検体数	Cs検出検体数
市内産農産物	横浜市内産の農産物	35	4
市内産水産物	横浜市内漁港水揚げの魚介類	75	0
市内産畜産物	横浜市内産の原乳	4	0
市内量販店流通食品	横浜市内で流通している食品	70	1
小学校給食	主食のパン・米類及び牛乳など	399	0
合計		583	5

表2 検査結果

検体の種類	検査検体名 []内は検体数	Cs検出検体 []内はCs検出 検体数	結果(Bq/kg)		
			Cs-134	Cs-137	Cs合計
市内産農産物	うめ[1]、えだまめ[1]、柿[1]、かぶ[1]、カリフラワー[1]、キウイ[1]、キャベツ[1]、きゅうり[1]、玄米[1]、こまつな[3]、さつまいも[1]、しいたけ(生)[2]、じゃがいも[1]、だいこん[2]、たけのこ[1]、たまねぎ[1]、とうもろこし[1]、トマト[1]、なす[1]、日本なし[1]、にんじん[2]、ねぎ[1]、はくさい[1]、ぶどう[1]、ブルーベリー[1]、ブロッコリー[1]、ほうれんそう[1]、みかん[1]、水菜[1]、レタス[1]	えだまめ[1]	—	1.00	1.0
	しいたけ(生)[2]	1.07	5.27	6.3	
		1.70	7.08	8.8	
	たけのこ[1]	6.47	25.9	32	
市内産水産物	アカカマス[3]、アカシタビラメ[1]、イシガレイ[2]、イボダイ[2]、ウミタナゴ[2]、カサゴ[1]、カナガシラ[3]、コウイカ[1]、コショウダイ[2]、ゴマサバ[1]、サルエビ[1]、シリヤケイカ[6]、シログチ[9]、スズキ[9]、タチウオ[6]、チダイ[2]、ヒラメ[11]、ホウボウ[2]、マアジ[1]、マコガレイ[2]、マゴチ[1]、マサバ[2]、マダイ[1]、マルアジ[3]、ムシガレイ[1]	—	—	—	—
市内産畜産物	原乳[4]	—	—	—	—
市内量販店流通食品	加工乳[1]、片栗粉[1]、牛乳[14]、粉ミルク[9]、米(玄米)[2]、米(精米)[6]、鮭[1]、清酒[3]、清涼飲料水(乳児用食品)[5]、低脂肪牛乳[2]、豆乳[1]、とろろ[1]、乳飲料[6]、発酵乳[1]、ブルーベリージャム[1]、ベビーフード[10]、味噌[1]、ミネラルウォーター[2]、野菜・果実ミックスジュース[1]、緑茶[1]、りんごジュース[1]	牛乳[1]	—	0.782	0.78
小学校給食	あずき水煮[1]、牛乳[173]、米[78]、胚芽米[31]、発酵乳[5]、パン[74]、麦[36]、もち米[1]	—	—	—	—

【 理化学検査研究課 微量汚染物担当 】

横浜市感染症発生動向調査報告 4月

《今月のトピックス》

- インフルエンザが昨シーズンより5週遅く、警報解除基準値(定点あたり10.00)を下回りました。
- A群溶血性レンサ球菌咽頭炎の報告が例年より多くなっています。
- 流行性耳下腺炎の報告が例年より多い状態が続いています。
- 流行性角結膜炎の報告が例年より多くなっています。

全数把握の対象

【4月期に報告された全数把握疾患】

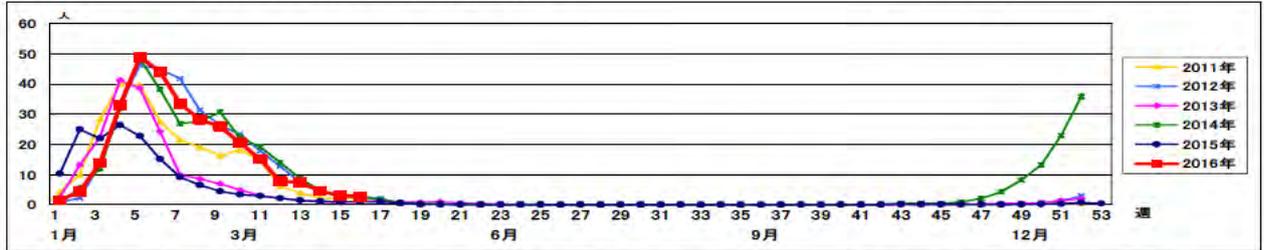
腸管出血性大腸菌感染症	1件	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	3件
E型肝炎	1件	侵襲性インフルエンザ菌感染症	1件
デング熱	1件	侵襲性髄膜炎菌感染症	1件
レジオネラ症	5件	侵襲性肺炎球菌感染症	12件
アメーバ赤痢	3件	水痘(入院例に限る)	3件
カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	2件	梅毒	9件
急性脳炎	3件	風しん	2件

- 腸管出血性大腸菌感染症:1件のO111 VT1の報告があり、海外(フィリピン)での経口感染が推定されています。
- E型肝炎:1件の報告がありましたが、感染経路等不明でした。
- デング熱:1件の報告があり、海外(パラグアイ)での感染が推定されています。
- レジオネラ症:5件の肺炎型の報告があり、うち2件は神奈川県の水系感染と推定、1件は静岡県の水系感染と推定、2件は神奈川県で感染経路等不明でした。
- アメーバ赤痢:腸管アメーバ症3件の報告があり、1件は海外(中国(上海))での経口感染、もう1件は国内での経口感染が推定され、さらにもう1件は神奈川県または海外(ベトナムまたは韓国)での経口感染が推定されています。
- カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症:2件の報告があり、神奈川県での手術部位感染、1件は感染経路、感染地域不明です。
- 急性脳炎:2件の幼児、1件の児童の報告がありました。いずれも病原体不明です。
- 劇症型溶血性レンサ球菌感染症:2件の高齢者の報告は国内での創傷感染が推定され、もう1件の成人例は感染経路等不明でした。
- 侵襲性インフルエンザ菌感染症:成人例1件の報告がありました。ワクチン接種歴は確認できませんでした。
- 侵襲性髄膜炎菌感染症:高齢者の報告が1件ありました。感染経路は不明で、共同生活ではありませんでした。
- 侵襲性肺炎球菌感染症:幼児は1件の報告があり、4回のワクチン接種歴が確認されました。成人例は2件の報告があり、いずれもワクチン接種歴は確認できませんでした。高齢者は9件の報告があり、うち1件は1回のワクチン接種が確認され、もう8件はワクチン接種歴が確認できませんでした。
- 水痘(入院例に限る):成人例の報告が2件、高齢者の報告が1件あり、いずれもワクチン接種歴は確認できませんでした。
- 梅毒:9件の報告(早期顕症梅毒Ⅱ期2件、早期顕症梅毒Ⅰ期4件、無症状病原体保有者3件)があり、うち8件が国内感染例で、1件は感染地域不明でした。感染経路はいずれも異性間の性的接触でした。
- 風しん:40歳代男女の検査診断例の報告が1件ずつありました。いずれもワクチン接種歴は確認できませんでした。

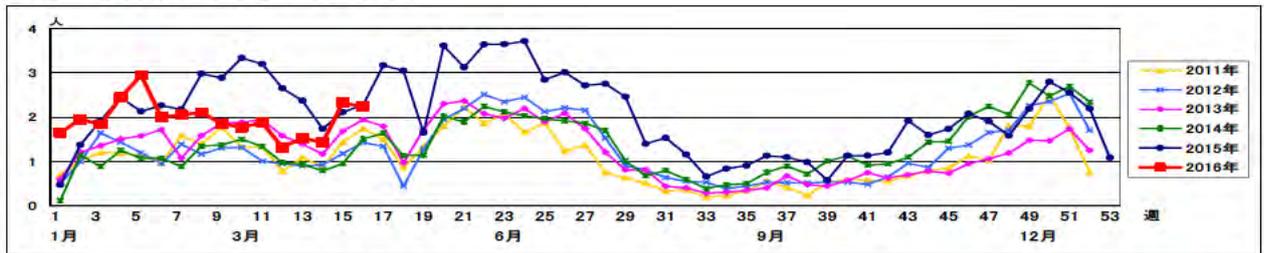
定点把握の対象

平成28年 週一月日対応表	
第12週	3月21日～3月27日
第13週	3月28日～4月 3日
第14週	4月 4日～4月10日
第15週	4月11日～4月17日
第16週	4月18日～4月24日

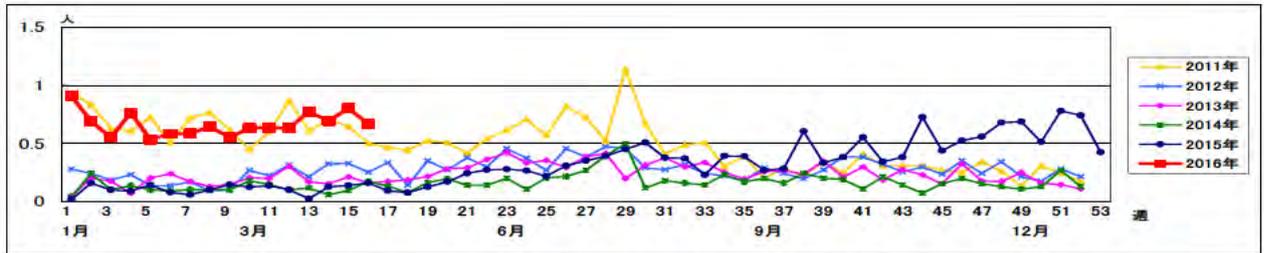
- 1 インフルエンザ:第12週(3月21日～27日)の定点あたりの患者報告数が横浜市全体で7.76となり、昨シーズンより5週遅く警報解除基準値(定点あたり10.00)を下回りました。第12週、第13週(3月28日～4月3日)の区別では10.00を上回っている区もありましたが、第14週(4月4日～10日)ではすべての区で10.00を下回りました。



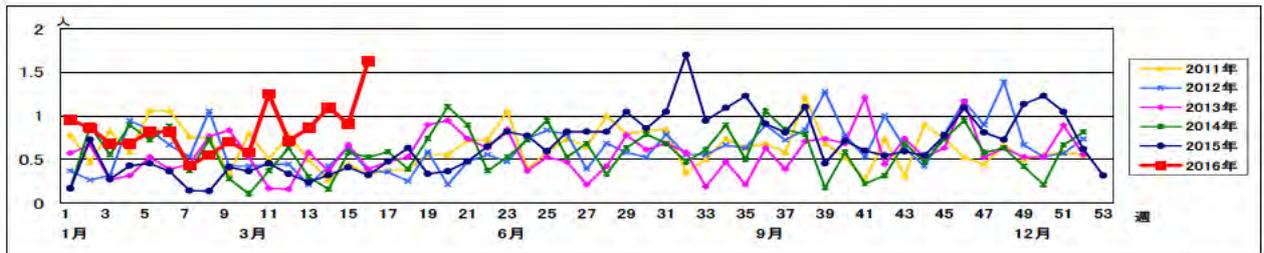
- 2 A群溶血性レンサ球菌咽頭炎:第14週までは減少傾向でしたが、第15週で2.32、第16週で2.24と例年に比べて報告が多くなっています。



- 3 流行性耳下腺炎:第16週は市全体で定点あたり0.67と、例年に比べて報告が多い状況が続いています。



- 4 流行性角結膜炎:第16週で1.63と例年に比べて報告が多くなっています。



- 5 性感染症:3月は、性器クラミジア感染症は男性が23件、女性が9件でした。性器ヘルペス感染症は男性が3件、女性が8件です。尖圭コンジローマは男性5件、女性が3件でした。淋菌感染症は男性が13件、女性が1件でした。
- 6 基幹定点週報:マイコプラズマ肺炎は第12週0.75、第13週0.00、第14週0.25、第15週0.00、第16週1.00と報告されています。感染性胃腸炎(ロタウイルスによるもの)は第12週0.50、第13週0.00、第14週1.00、第15週0.00、第16週0.50と報告されています。細菌性髄膜炎、無菌性髄膜炎、クラミジア肺炎の報告はありませんでした。
- 7 基幹定点月報:3月はメチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症9件、ペニシリン耐性肺炎球菌感染症および薬剤耐性緑膿菌感染症の報告はありませんでした。

【 感染症・疫学情報課 】

◇ 病原体定点からの情報

市内の病原体定点は、小児科定点:8か所、インフルエンザ(内科)定点:4か所、眼科定点:1か所、基幹(病院)定点:4か所の計17か所を設定しています。

検体採取は、小児科定点とインフルエンザ定点では定期的に行っており、小児科定点は8か所を2グループに分けて毎週1グループで実施しています。

眼科と基幹定点では、検体採取は対象疾患の患者から検体を採取できたときのみ行っています。

<ウイルス検査>

4月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点44件、内科定点15件、眼科定点1件、基幹定点16件で、定点外医療機関からは4件でした。

5月9日現在、表に示した各種ウイルスの分離株33例と遺伝子20例が同定されています。

表 感染症発生動向調査におけるウイルス検査結果(4月)

分離・検出ウイルス	主な臨床症状	上気道炎	下気道炎	インフルエンザ*1	RS感染症	感染性胃腸炎	インフルエンザ脳症
インフルエンザ AH1N1pdm09型				6			
インフルエンザ AH3N2型				2			
インフルエンザ B型ビクトリア系統		2		9	1		
インフルエンザ B型山形系統			1	11			1
パラインフルエンザ 1型			1				
パラインフルエンザ 2型		1					
パラインフルエンザ 3型		1					
RS		1		1	1		
ヒトコロナ*2			2				
ヒトメタニューモ			3				
ライノ		2	3				
ノロ						2	
ロタ						1	
合計		2	1	28	1		1
		5	9	2	1	3	

上段:ウイルス分離数/下段:遺伝子検出数

*1:疑いを含む、*2:HCoV 229E or NL63、HCoV OC43

【 微生物検査研究課 ウイルス担当 】

<細菌検査>

4月の感染性胃腸炎は、基幹定点から6件で、サルモネラ(*S. Chester*)が検出されました。

その他の感染症は、小児科定点から4件、基幹定点から5件、その他からが16件でした。定点以外医療機関のA群溶血性レンサ球菌(T型別不能)は、劇症型溶血性レンサ球菌感染症患者から検出されました。

表 感染症発生動向調査における細菌検査結果(4月)

感染性胃腸炎

検査年月 定点の区別 件数	4月			2016年1月~4月		
	小児科	基幹	その他*	小児科	基幹	その他*
菌種名						
赤痢菌						1
腸管出血性大腸菌					1	1
サルモネラ		1			6	1
カンピロバクター						1
不検出	0	5	0	0	17	5

その他の感染症

検査年月 定点の区別 件数	4月			2016年1月~4月		
	小児科	基幹	その他*	小児科	基幹	その他*
菌種名						
A群溶血性レンサ球菌				1		
T4						
T6	1			1		
T12	2			2		
型別不能	1		1	8		1
B群溶血性レンサ球菌						1
G群溶血性レンサ球菌					2	1
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌		1			4	
レジオネラ属菌						1
インフルエンザ菌						1
肺炎球菌		2	1		5	32
結核菌			11			102
百日咳菌					1	
その他		1	1		6	10
不検出	0	1	2	2	8	15

*: 定点以外医療機関等(届出疾病の検査依頼)

T(T型別): A群溶血性レンサ球菌の菌体表面のトリプシン耐性T蛋白を用いた型別方法

【 微生物検査研究課 細菌担当 】

衛生研究所WEBページ情報

横浜市衛生研究所ホームページ(衛生研究所WEBページ)は、平成10年3月に開設され、感染症情報、保健情報、食品衛生情報、生活環境衛生情報等を提供しています。

今回は、平成28年4月のアクセス件数、アクセス順位、電子メールによる問い合わせ、WEB追加・更新記事について報告します。

なお、アクセス件数については市民局広報課から提供されたデータを基に集計しました。

1 利用状況

(1) アクセス件数 (平成28年4月)

平成28年4月の総アクセス数は、76,555件でした。主な内訳は、感染症情報センター73.1%、保健情報8.4%、食品衛生4.2%、検査情報月報2.9%、生活環境衛生2.5%、薬事0.6%でした。

(2) アクセス順位 (平成28年4月)

4月のアクセス順位(表1)は、第1位が「エンテロウイルスについて」、第2位が「横浜市インフルエンザ流行情報12号」、第3位が「クロストリジウム-ディフィシル感染症について」でした。

4月の総アクセス数は、前月に比べ約20%減少しました。4月に入り、インフルエンザの流行は減少傾向となっています。ただ、アクセス順位を見ると、感染症関連の項目が多数を占めています。1位のエンテロウイルス

による感染症は、国内で昨年8月以降、発熱などに伴いまひの症状が出る原因不明の症例が、子供で相次いで報告されました。3位のクロストリジウム-ディフィシル感染症は、老人や免疫機能が低下している人たちに多く発生します。

表1 平成28年4月 アクセス順位

順位	タイトル	件数
1	エンテロウイルスについて	3,884
2	横浜市インフルエンザ流行情報12号	3,016
3	クロストリジウム-ディフィシル感染症について	2,935
4	横浜市感染症情報センター	2,723
5	衛生研究所トップページ	2,253
6	B群レンサ球菌(GBS)感染症について	2,060
7	粉ミルク(乳児用調整粉乳)を70℃以上のお湯で溶かす ワケを知っていますか?	1,805
8	EBウイルスと伝染性単核症について	1,572
9	インフルエンザ流行情報(2015/2016)	1,392
10	ぎょう虫(蟯虫)症について	1,348

データ提供: 市民局広報課

「エンテロウイルスについて」に関連する情報

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/disease/entero1.html>

「横浜市インフルエンザ流行情報12号」に関連する情報

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/rinji/influenza/2015/rinji12.pdf>

「クロストリジウム-ディフィシル感染症について」に関連する情報

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/disease/clostridium1.html>

(3) 電子メールによる問い合わせ（平成28年4月）

平成28年4月の問い合わせは、1件でした(表2)。

表2 平成28年4月 電子メールによる問い合わせ

内容	件数	回答部署
GBSに関する質問	1	感染症・疫学情報課

2 追加・更新記事（平成28年4月）

平成28年4月に追加・更新した主な記事は、10件でした(表3)。

表3 平成28年4月 追加・更新記事

掲載月日	内容	備考
4月 4日	イエメン共和国のこどもの定期予防接種について	掲載
4月 6日	ブータン王国のこどもの定期予防接種について	掲載
4月 8日	スリランカのこどもの定期予防接種について	更新
4月13日	モルディブのこどもの定期予防接種について	更新
4月15日	バングラデシュのこどもの定期予防接種について	掲載
4月19日	パキスタンのこどもの定期予防接種について	掲載
4月21日	アフガニスタンのこどもの定期予防接種について	掲載
4月22日	ミャンマー(ビルマ)のこどもの定期予防接種について	更新
4月26日	ブルネイのこどもの定期予防接種について	掲載
4月28日	インドネシアのこどもの定期予防接種について	更新

【 感染症・疫学情報課 】